

8) センリョウとヒャクリョウ(カラタチバナ)=千両と百両

センリョウはセンリョウ科の常緑小低木で、中部地方以南の湿った山林などに生え、鑑賞用としてしばしば庭園に植えられる。高さ 50~70cm、葉は対生し先が尖り、縁には鋭い鋸歯がある。初夏、枝先に淡黄緑色の小花を穂状につける。果実は球形で冬になって赤く実ると、果実には二つの黒い小点が現れる。この小点の一つは雌蕊の柱頭と、もう一つは雄蕊の跡である。園芸種には果実の色が黄色いキミノセンリョウなどの変種がある。和名の由来はヤブコウジ科の万両に対して千両の意味で、同じくヤブコウジ科のカラタチバナが百両であるのに対し、センリョウと付けられたものである。別称としてはクササンゴ(草珊瑚)などともいわれる。学名は『*Chloranthus glaber*』で、属名は「黄緑色の花」を意味し、種小辞は「無毛の」という意味である。中国では『珊瑚』『接骨木』などと呼ばれている。

千両は我が国の原産種で、以前は『仙寥果』とか『仙寥花』と表わされていた。千両の文字が与えられるようになったのは、江戸時代末期になってからのことで、当時カラタチバナを百両、ヤブコウジを十両、それぞれ縁起ものとして扱われており、そこに『仙寥果』が千両として登場したのである。現在も千両の縁起ものとしての価値は変わらないが、年末の縁日で千両と称して売られているものには、偽物がけっこう多い。中にはヤブコウジの小苗を束ねて、茎頂に人造の赤い実を付けたものなどもある。これはこれでなかなか美しいので、そのことを納得して購入するならよいのだが、本物の千両と思って買うと、贋作だったというわけである。

一方、百両のカラタチバナはヤブコウジ科の常緑低木で、関東以西の山林中に生え、庭木としてしばしば植えられる。高さは 30cm で葉は細長く先が尖る。初夏、葉腋から花柄を伸ばし白色の 5 弁の小花を多数つける。果実は径 5~6mm ほどの球形で赤く熟して翌春遅くまで残る。園芸品種の中には白実のもの、黄実のもの、桃色実のものなど変化が多く、また斑入り葉などもある。このため園芸品として江戸時代に大流行し、その数は 66 品種を数えたほどであった。中国では『百両金』と呼ばれていたが、これが十両、千両、万両などのネーミングの元祖となったことは言うまでもない。和名の由来はヤブコウジの古名であるヤマタチバナに対してつけられたとする説がある。別称としては単にタチバナとか、アカタチバナなどの他、コウジ、ヒャクリョウ、センリョウなどである。学名は『*Ardisia crispa*』で、属名はヤブコウジのところで述べた通りで、種小辞は「皺のある」という意味である。前述の通り中国では『百両金』とよばれていた。

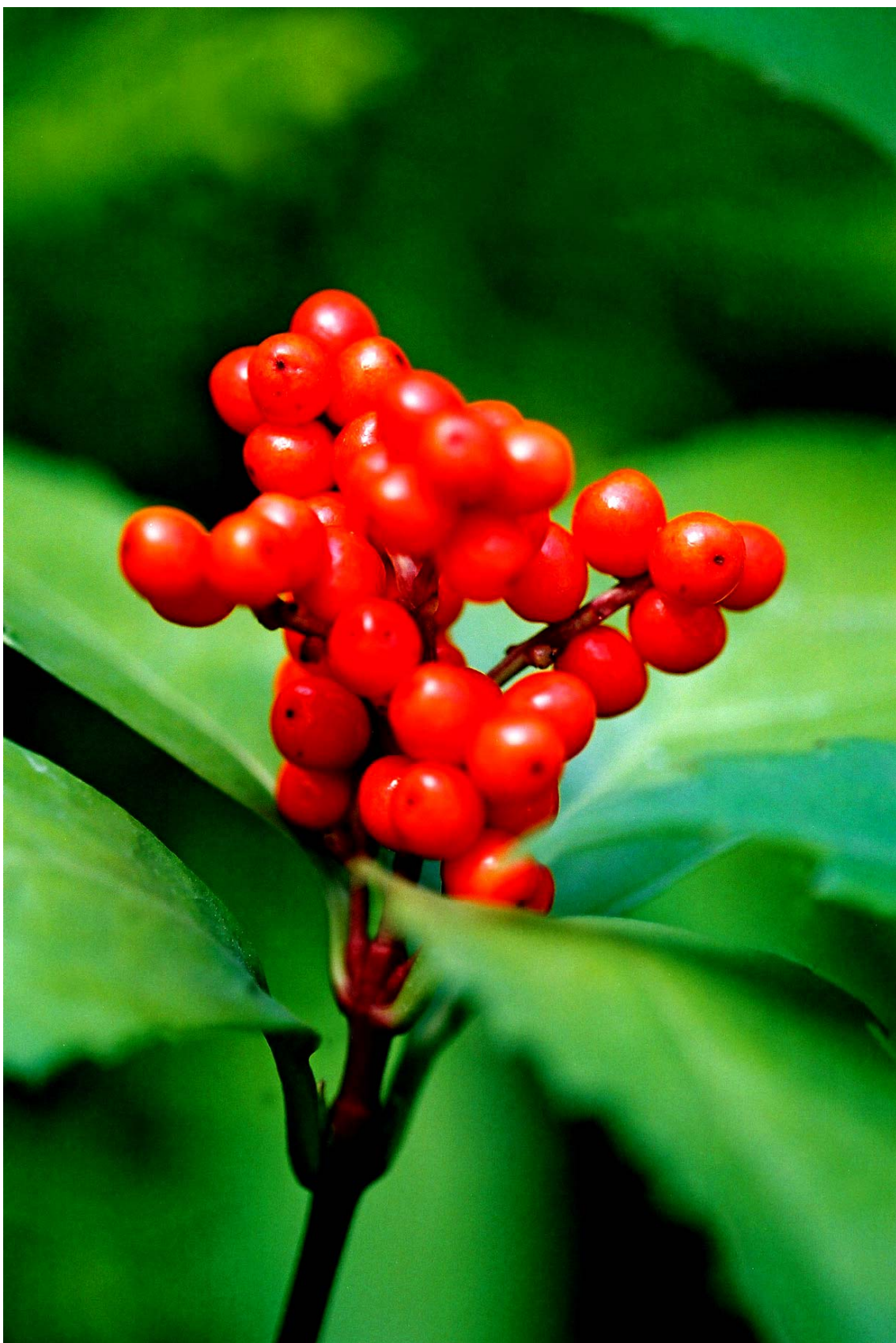
センリョウもカラタチバナも繁殖は実生で、実が生るまでには結構な時間がかかる。また播種して翌年発芽するとは限らない。意外と翌々年に発芽するものも少なくない。カラタチバナは特に寒さに弱いので、関東あたりでも冬は落ち葉で凍らないように工夫したり、鉢植えにして室内に取り込む方が無難だろう。



センリョウの花も目立たない花の代表格である。というのも花には花披がなく緑色が雌蕊で白色が雄蕊である。このタイプの植物はかなり原始的なものと考えられる(さいたま市浦和区)



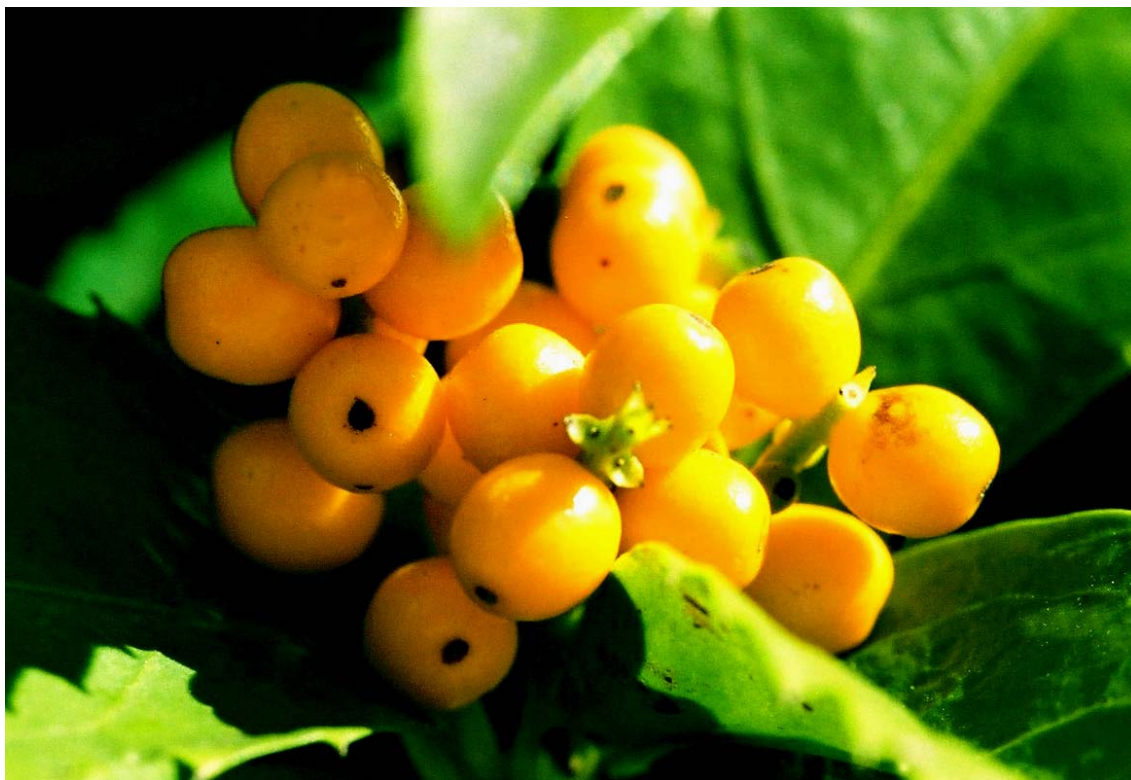
赤実のセンリョウはお正月の大事な彩でもある(さいたま市浦和区)。



赤実のセンリョウの果実。播種しておけば5年ほどで果実をつける(さいたま市浦和区)。



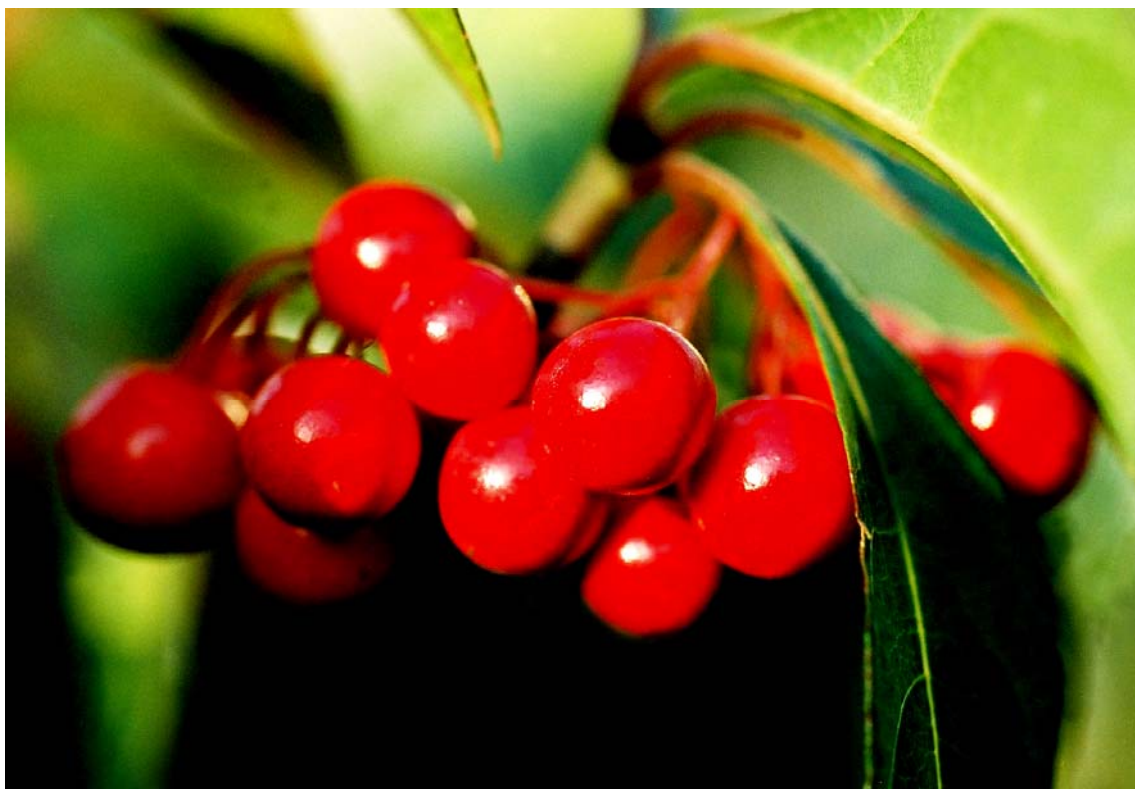
センリョウには黄色の実をつける種もあり、赤実のものよりはやや珍しいかもしれない。しかし鳥の落とし物から黄実のセンリョウが生まれることもしばしばである(さいたま市浦和区)。



完熟した黄実のセンリョウの果実。ややオレンジ色に近くなる(さいたま市浦和区)。



ヒヤクリヨウの花、別名はカラタチバナであるが、その由来は柑橘類の橘に花の形が似るためとされている。確かに似てなくもないが定かではない(さいたま市浦和区)。



ヒヤクリヨウの果実。常緑樹林の中でこの実を見つけたときは感動した(埼玉県深谷市)。



ヒヤクリヨウの果実。さいたま市三室区の小島邸は熊谷草で有名である。その裏山にはこのヒヤクリヨウが多く、数百年昔の武蔵野そのものが息づいている(写真は埼玉県深谷市)。



赤実と黄実のヒヤクリヨウを寄せ植えにしたもの(埼玉県深谷市栽培品)。

[目次に戻る](#)